

水稻種子予措のポイントについて

【丈夫で健康な苗づくりには種子予措がその第1歩】

暑さ・寒さも彼岸までと言われていますが、まだまだ気温は低く、このような低温下では種子消毒剤の効果の低下や、休眠が深まり出芽が遅れることがあります。そのため、田植え日から逆算した育苗計画と、次の作業の適切な管理を計画的に行い、丈夫で健康な苗づくりにつなげましょう。

★ **塩水選**: 種子予措は、健全な充実した種子を選別することから始まります。塩水選(比重選)で軽い種子を除くことにより発芽が揃い、その後の生育も優れます。

◎塩水選の比重は、うるちが1.13、もちは1.08で行い、食塩などで正確な比重液を作ります。

※ただし、種子消毒剤吹き付け・塗沫済み種子は消毒剤が溶出するので塩水選は行わないでください。

★ **種子消毒**: 種子伝染性病害の苗立枯細菌病、もみ枯細菌病、いもち病、ばか苗病などを対象に行います。また、防除効果を発揮させる適正な処理とともに消毒後の廃液は適正に処理してください。

◎種子伝染性病害(ばか苗病等)を防ぐため、自家採種は行わず、採種は産種子を用います。

★ **浸種**: 種子の発芽を揃えるために、発芽に必要な水分を吸収させるとともに種子に含まれる発芽阻害物質を溶出させ、取り除く管理です。

◎浸種の適水温は10～15℃。期間中に胚が発芽活動させないことが大切です。

10℃以下の低温で浸種すると、休眠が逆に深まる場合があります。一方、14℃で8日以上浸種では、浸種期間中に発芽を開始することがあります。種子消毒剤の効果をも高めるためにも、10～15℃の適水温を保つことが大切です。(水温10℃では6～8日、水温14℃では6日程度が良い)

◎使用する容器は種子量に対して大きめの物、水道水かきれいな水で浸種をします。

種子1kgに対して水3.5ℓが目安であり、底が浅い平底型の大きい容器を用いると、温度のムラが少なくなります。品種ごとに種子袋の色を変えるなど識別できるようにし、同一品種は同じ容器に入れます。また、種子伝染性病害の感染を防ぐため、同一の容器で品種や消毒方法が異なる種子は浸種しないでください。

◎発芽に必要な吸水量は乾粒重の25%前後となります。

種子は吸水すると容積が増えるので、入れる量は種子袋の50～60%とします。吸水によって粒の呼吸が盛んになり、水中の酸素を消費するので水交換を行います。交換は、粒の水をあらかじめ切ってから、上下を逆にして入れます。期間中の水交換は種子消毒剤の効果をも高めるため、2～3回程度とします。

◎浸種終了の外観目安は、粒を透かしてみても、胚が白く見えるようになった時となります。

★ **催芽**: 発芽の粒間差を小さくし、均一に芽を出させます。

◎内部の種子まで均一な温度となるように36～40℃のお湯で湯通しし、30～32℃で行います。

温度は高くても低くても、発芽ムラになるので注意します。催芽中は、水分を切らさないようにし、芽の長さは1mm(ハト胸)程度とします。

発芽速度には品種によって、年により休眠性に差があります。また、催芽作業の時期によっても異なるので、催芽の程度は十分な観察をします。

◎催芽の程度(芽の長さや芽切れの揃い)をよく観察して、催芽を終えるようにします。

※詳細については、お近くのJA営農センターや地域振興局農業振興普及課にご相談を

お問合せは 米穀部 米穀総合課(小松) 018-845-8034 へ

